770
ハ
2

目一 一 鞭乃名并うつ所之馬乃事
二 一 手綱乃名并乗へさるの事
三 一 馬乗足乃名の事
四 一 行くまる乃事
五 一 はくは馬乃事
六 一 のりく出れるの事
七 一 さ物まる乃事
八 一 そらなをりさ向くる小馬乃事
九 一 乗附あり乃事

九州大學圖書
九州大學 昭和24.7.13 184084 圖書館

十 一 ゆひる乃事
十一 一 たつ馬の事
十二 一 こらへる乃事
十三 一 三ツ馬乃事
十四 一 なかゆふるの事
十五 一 なけゆるる乃事
十六 一 轡ならす馬乃事
十七 一 ゆえんまなきふゝる乃事
十八 一 はふのさくとまゝね馬か事
十九 一 あふのくる乃事
廿 一 あはのくる乃事
廿一 一 つゆし乃事
廿二 一 つふし乃事
廿三 一 梅はたくわねる乃事
廿四 一 梅まゝ渡馬の事
廿五 一 口ほゝさるゝ手綱まく事
廿六 一 轡ならしぬうてとまるる乃事
廿七 一 たれまくねむるの事
廿八 一 ふゆまく梅まくはさけゐる馬乃事
廿九 一 一股とはふはさくゆるの事

三十 一 もとこえひのなくあしはるの事

三十一 一 もとこえひのなくしめる馬の事

三十二 一 介けるの事

三十三 一 一段乃人むさるの事

三十四 一 はねよき馬乃事

三十五 一 口乃手綱のふ長さるかの事

三十六 一 馬出てくとらしすりく行るの事

三十七 一 まい文ハうけなし馬はかなそ行事

三十八 一 くや道にりいかのきされさる事

三十九 一 大近抱乃付緒よく反さひ出れ馬の事

四十 一 ちさしねる乃事

四十一 一 ちさしねる乃事

四十二 一 ちさしね馬乃事

四十三 一 ちさしねるの事

四十四 一 こむ馬乃事

四十五 一 こむるの事

四十六 一 こ呑馬かへの事

四十七 一 あ呑る乃事

四十八 一 こむ馬の事

四十九 一 抱まきうるれの事

五十 一 口取まへ入りまへにも弓ゐる事

五十一 一 手くらはまへ馬にて渡まで乗事

五十二 一 馬場からさをさす事

五十三 一 あまきたる乗人の鞍の押乃事

五十四 一 あらき馬にのせ取なるの事

五十五 一 ゆるき道乃事

五十六 一 ほそき橋の事

五十七 一 すへり道の事

五十八 一 沼にて乗す事

五十九 一 ととをする事

六十 一 さか乗事

六十一 一 さかをおろしの事

六十二 一 くらにあくるゝ事

六十三 一 かんをとられたるときの

六十四 一 くらはつれ乃方の事

六十五 一 ふる乗事

六十六 一 川をこす舩き事

六十七 一 おりかする事

六十八 一 下りに乗る乃事

六十九 一 上りに乗馬の事

七十 一 足出ならす時ものりて乗事

七十一 一 よこたはる乃事

七十二 一 よこ川馬乃事

七十三 一 指むるかね事

七十四 一 口取りてこれたになるとまりぬる事

七十五 一 くち取りてうちたたにあしとかりぬる事

七十六 一 流くれ馬ならすとてすまきんの事

七十七 一 壽るかはる乃事

七十八 一 壽のくる馬乃事

七十九 一 壽の口よ吉へのりる乃事

八十 一 壽百四十なる馬て綱さばれ乃事

八十一 一 まえしたる口むる所乃事

八十二 一 路馬口むる江かる事

八十三 一 あまきぬる口むる所の事

八十四 一 口取川寄とり事

八十五 一 馬よりさかれくまるの事

八十六 一 足取りてさんするは百四十ずる事

八十七 一 鞍まへ志つき所乃事

八十八 一 轡乃帯とれの事

八十九 一 手綱長さと取れ乃事

九十 一 馬ニ乗候乃絵図有之事
九十一 一 長鞭乃しらへ様の絵図乃事
九十二 一 手綱乃鞭かくしらへ様の事
九十三 一 鞭の抱様并百曲鞭あてしやう乃事
九十四 一 い氣をひかへ乃事
九十五 一 きよんねさと鞭しさる乏様乃事
九十六 一 大相るんさまりえ様の事
九十七 一 たりをなしやくはむ様の如く乗事
九十八 一 えり鞭をさきえくしねうる事
九十九 一 様をさはまむ乃事
百 一 さつそくはなさき乃事
百一 一 さつそくつるさきの事
百二 一 ろうさ鞭をさうくさ手する事
百三 一 扇すく馬をもあそさせ上手する事
百四 一 はやる馬きおとさせる事
百五 一 ふる手綱の労をとるは先様く乃曲乗乃事
百六 一 百曲乃るとりわさなとも馬乗様の事
百七 一 のりさ一段によきある様よく乗事
百八 一 口相もはやき馬よりて乗事
百九 一 乗なくをとりきさ乃とされ乗なきこ事

百十 一 い氣あひの針の事

百十一 一 はまくりゑの針の事

百十二 一 同一服とつまくきはり針の事

百十三 一 たにいりむしるに請くすり薬事

廿一 一 鞭乃名并うね留き馬ある事

一 くさきるとのむちは

一 川ゆみ時なゝ返と一段まうりや

一 なゝ返しのむちと

ゐとふしの時落さわと一段ごうりや

一 ゆくいのむちは

さきさるとこむるにさ手すな利

一 壱番ゝのむちと

去さくわ時毎出入る又ハ曲ゆもさ手すな利

一 らくのむちと

一 相伝ニ秘伝ハいさゝか語るべからざるなり

一 手のむちハ
たゝかるゝ又たつゝね馬或ハ曲とし

一 あさまくてあるのむちとも
あつこそえひするべからずや

一 山坂のむちハ
川伏坂のくる一段よし

一 長むちとも
人のはよせなとによりて又百曲ともいふや

一 夜目のむちハ
ちさくあたるなりや

一 腰のむちハ
えひあふれくはよくしなとあたるよし

一 さくりあとのむちとも
人のまうけなき利

一 さくはみのむちハ
むとひきなりや

一 手のうちのむちハ
はやき馬にのれ手綱よく乗とまるよし

一 毛はなれのむちとも

一 ねはこさする時かりや
なと新のむちとて
志り無きかり用ゐるべからずや

一 せんたんのむちハ
未無きかりまわらしそれまくむべき

一 雲なけのむちハ
無きハまりかねざりや

一 名さえんのむちハ
ゐむ馬よし

一 さくらなどの鞭ハ菊花ハのむちとも云

一 乞村乃むち　すもうるものむち　せんたんのむち
雲なけのむち　けいこむかむちハ大方れ鞭の名也

一 手綱乃名并乗ぐさ馬かかる事

一 三乃手綱ハ
はくはるまさきさる利

一 名もとれて
とらしむべしよし

一 父母の手綱も
人川すざるく行るべし

一 むけいの手綱ハ

ともしねるよし

一　きぬくしの御絵ハ
なけゆきるなともしるよし

一　日んきんまくてんの御絵ハ
御まちつけをきるなんの御絵を斗よし

一　きくしるもの御絵ハ
たて御綱をのるよし

一　するすの御綱ハ
人ひきたなすくしも川身だけ何又あさしぬるかと者
なり

一　杉のきのみ綱を
人ひきてもみても川身に名川又あさし旦馬
あとよし

一　あいのたちを
人川かたれも川身に名川よし

一　きりよの御綱を
人ひきにくても川身にかけ川によし

一　うらき徐の御綱ハ
一度とゆらすかのやもと川とよし

一　いまのれんの御綱ハ

一 あみはさとらるしあけしく入鳥あまたと
行よし

一 むらしかきの御網を
さや道家村やらなあすいるきれは御やし
の家よし

一 色かい矢の御網は
大道地村網にておもいまた多くるなり

一 さしなすとの御網は
人川并にかくめくる名文をぬるかとよし

一 たかねうしの御網は
ささしぬるによし

一 志らめの御網を
きりなくこちられたかれするゝふ石

一 柱いとしめの御網は
一陸の入川よし

一 たかはすの御網を柱わしとると

一 あしの御網とさかやとると

一 四の御網の名此事

一 うちこはの御網　岩の口の御網

一 むらしつの御網　色かい矢の御滝

第三

馬宗足の名事

一 ばあし　一 ぢゝく
一 多く　一 轉こあし
一 夕笛施り　一 風ん打り
一 はあたり　一 たりとあ
一 はらなり　一 だりこ
一 つましこと　一 くけなり
一 夕し施り　橋とも云　車とも云

四 一 はく家馬の事
むまやうち間つけ宗ちんまれと引出して宗へし

五 一 はく杯る乃事
口れ之のうし引こるようれてされ宗へし其時ハ
宗ハ此事てんきへし

六 一 くつくせ落ると鞍らへあらし宗へし鞍らへ上
ハれたの足いつまかてゐたくとかんけかこし
をらへ間としてこねしよれるかふんてるか
たの間とたかくとあり又かるくれハ間ときてよ
まつけすて乞さまを打や乞と鞍らへとと

七 一 そ津家馬の事
さわ橋とかりまく跳ともいさし雲とすさ

宗へし

八

一 くらなをりさゆ小ゆふるの事
れの手綱をもみしよとりかへ右の手にて手綱み
しかくとりにもちてさしきとれは成るを
すとおもしろくよりかつかてはなるへし

九

一 乗付いけるの事
手綱を馬の前足にまつはけ成るやうにとかし
て乗るよしとてもなりいかへいふも前
輪にかゝりてはつるへしへしるたも詳りつゝやく
はるすへし

十

一 立つ馬の事
たて付くつゝき成る女の手かそれいふも前輪よ
かゝつるまゝに付れの手綱をもれかへよれ是へ
てそのまゝ右へはりしこみて乗へし

十一

一 まはれるの事さぬかくしほと乗へし
ころぬかくしとはこはらくよた右なりとも
はの手綱をもみしよとるへて中をはへ
しらいて乗へし そうりた

十二

一 ぬけるの事さぬかくしほと乗へしさぬか
久しとはされるよい右へされいたのもみへよれ

十三 一 かくしれハ二さしい右のむなかいにれかくし
とふ鳥の事二さぬかくしみて家へしこさぬか
くしハいつもしまへのことし

十四 一 なか者うる馬さしる事
むなかいへ毎の小腹とより足へ鐙とあり出へ

十五 一 なけかけるとしる事二さぬかくし口くの外
色しこさぬかくしとかたくの小腹のむなかい
小れ副る右へなけかけハ右のむなかいよとる
かくし又右へ前足右腕とりかくし

十六 一 書といふ馬の事二さぬかくしみて家に

十七 一 こぬかくしハまへのことくつかう
いさんよな者かけ馬の事二さぬかくし口く家
色しこさぬかくしハいまとまへのことし

十八 一 何けぬけそと海を越る事二さぬかくし口く
家色しこさぬかくしハいまとまへのことし

十九 一 あけのつる事山なく鞍台山なくのもちとハ
馬の耳比間より出

廿 一 何けのつる事
前橋よりつまりをとりあてたてこれしかれ
て家へ

廿一
一 川つゞみるの事 波くしの鞭（むちと）まきあれ
むちとなすへし
波くしのむちとは前ろさの中のへをおさ
第二わとはおとしいふなりや

廿二
一 川ぬけしたるの事 山にてはいのむちならる
てしたまはいのむちとは右の手のおしいれて

廿三
一 地ばんるの事 ちゞのむちをうつへし ちゞの
むちとは右の手のさきをちやうくとむちん
うつへし

廿四
一 地をみる馬の事
あら気みし京さらしき南小地のうちうさの月の
とかりよ鞍成さし出しをさえしかうらし小鞍
をんさく地のおもてをさうくとる
口にはのきこるうた手綱小あり京事さくとつりの
手綱かけ京へし

廿五
一 さつしうつをとはたのうきの手綱つよくおさゑむち
いつもの所よ手綱あてはつしらひして京へし

廿六
一 くはとしし地をしてと南る事さこてうり
のこうら川かけ京へし
指うりのさこら川とは手綱成こおてよもしらひつ

くれ〴〵母にしかられて　へつらひをして孫の
ことゝもちゐることはふかくやまよふ之
しらくのまゝにてはうみ成るをしるへし之
らし家へし

廿七
一　かりにもそねむるの事　父母にかくす家也
父母といゝねたむこれは腹立るくれそこれ
より腹にいでゝしれよりしきりこのを知を
乱さして家へし

廿八
一　人口にかゝる孫ゝにはさけて行るの事
まるゝと父母にて家へし

するとも腹たち腹立は引わろく色をかへてあらゝ
くしといふをして家へしねらへてはらをさ
前には父母にかくすへし父母にまたくのこすへし

廿九
一　腹をたつことやすくさゝるの事
に深くねたるゝことこれかしれいかにも色にあらはす
らずたてゝさも前にてはよるまでまたせて家へし
をかし小家にはよらかねは親もとかねて見かとわろく野や

三十
一　すとくちのまへ行家る事
ともる時のうち腹さへのたつぬへに腹をとゞをしたの
にをさめはふとつま腹をかへせしいてもし

三十一 一 ことくひのなくへるるとも同事あのさね
てへるるとゝして現をみつけりとむかう
さいなやしの百田の馬をとまうるへし前の
手綱とてま入何れつきとうきや

三十二 一 入江る乃事
とまし如る手綱をとしヶ前よれ々く次なる
まゝ引きて又我手めて江おるや

三十三 一 一段の入江る乃事様いとよみ先様にて宗
随ー
様いとよらい書のよみ乃くにりよ移り
くりの糸を渡りて尤さかいつかり宗へし
糸さしとは何れあるわけれともさしへし

三十四 一 口伝よきるの事長鞍よそ宗へし
長鞍とはくねまてとしらへて縮みてうみよ
ねいつけるう宗へしまうきわさそのとうのなさ
へかとへし

三十五 一 四の手綱乃随る乃事

三十六 一 るもとてに随らと引て江年うち家
手綱して宗へし
うちさる家手綱とくる乃随ぬ時右乃手綱

さまくあるて雲のさゝてしるてゐる比は
まかひのまやまでて足に深さしくから
れのうくこしあのに深らをしくつまさかゐ
とりくうと泥とせそろくれのうくありい
まし引ろゝく

一 三十七
まし又いろ前かしとへる何ゆり引事岩比
それをたは個めて家へし
岩のたほとあそこりいのそこいさ入らとるで
てし好くそりこへしれのうくやうしそこ

一 三十八
うや道家附たらかすよい事きれさる事

むちとひかりさんに緩めて宜し
むちとさかりとは 〇〇〇
めさちやつくと成ましく宜へし 此事秘事よ
長すなわりる若いき尤ましく利

一 三十九
大追物の時る乏めてほかひ出家又ちさけさる家
るの事さむらい矢の緩めて宜へし
さらい矢とは緩とするをりて入ても緩さきと
さりよさそて稽古の時ゐ用すへし

一 四十
さきし出るの事 四寸の鞍ッさらくし
四寸のむちとはさむを成さすへし

四十一

一 さゝぬるの事

あまたにとるくれはあらそひとるくとも鞍は
あくまて家にて千すて緒のつけて稀すへきこと
さまをすへし是をもてさゝ浅こし鐙打十

四十二

一 さゝぬる故は事にはなれしふれ有へし
はなれしといさいはとられまくはすれはさき
家の利

四十三

一 さきらぬ馬の事 上あの鞍かくろへし
上日のひ とらいるのまへにさのあ氏人に
うらかへしさしすへし

四十四

一 こむるの事 かやくいのむちかきて有へし
百いろ鞍とい引にいやくい針のはらふ所をさゝ
へしさて害しきのつよ有へし 害し
きとをとゝとりをさんはよつ数程にて
鐙は少んけるも有へし 害をこうてかるまきく
よ右は当數也

四十五

一 こむるの事 今さへんの鞍をもて有へし
なさへんのむちといかい稀よかける氏つあれ也
よくあいまろをつけてこむとさきは引とり往家
やしよさつのもへ有へし 夜もえてまき

四十六
一 こむ馬の事
仕組ハ前々のことくねしのむしに結ひ
つけてあとのさにハ緒を取てこむ付し
之也

四十七
一 こむるの事
要のかなめに鞁のくりは皮をさしこみてつき
いたしてしりよりていきるなり

四十八
一 こむ馬の事
ともりいとをとるそはへつきいてゝし
ふたりにてかけなれは付の仕合能之

四十九
一 ねよれるの事
ねよれるハ此鐙を一もんしに馬にかくへかとを
のかたへこの洗ハ文字にはくへし此れ
あきらかにして此乱もさしきてかけたて家に
ありせうくかてこれしにてのみ事也

五十
一 口はきる人にかくれ其身よりけむ縁をそ
とりるの事しさて波からすから父母此縁
とらやくしとらくまりあいしらいく縁ハ
いか成る馬も家へしきてかし鞍のうらうき
あるこ成ハむかしは中くのはましれこさ候

よろづ物とかへてかまされとも
さま波らいさんくくとものゝらとめし
らい善となし一家へし光ぞくるなりま
れなりき
おろすとか御縁はわくへの事一階と
身にか弟はなくて様ゝ村ちやりくとわちく
在ろへ善のうみは如きての影へし又いかとりと
同しわいさらいゝ利
かひの御縁といふたりよ道筆て影へし図り
よりけ方の御縁をゆ数まとつくまて申すべし

丑

一

たしよつ弟が但し文さ家同しこ
父母といふたくの御縁ちの上はよまるく丸
なくみ此御綱とまての上はまよさ弟て申す
かたのあるふよしもむ方の御はるれなた
てこへしよとりいて利
けくのはのきるたに御縁めて家事か金莫
傳めくのくし御綱はくそれくてれいさ
うち此数御縁のあいへ入とりまてのゝし
己はせんまん莫依とゆ之御のうちの数をけま
ハいおかうさし御縁るる

五十二
一 弓を持つきはさまへき事
口傳ハ金翅鳥之弓の法と獅子とらさきさ
そうようらへ弓代なしてそれに弓の法と取
劉をねかへ利

五十三
一 乗にくるのうへき鞍の持様の事
男なりとりとむたしみるいる事へ又ね乃わりみ
うわ鞍のうへいかふともたれさせ所へとまい
と云てみをかふとをかうまとの書しけ
れいをそのまとうしさきぬと宗と心かり
ほこうへし

五十四
一 さて先乃のり出馬の事 さての口傳あり
のくへし
さとさての左右あきさ云は下ケ様すす
日おり所かく事さへとたしへ左右さ代
左右つめ宗へし

五十五
一 引そさ道乃事
れの日ほかうた口傳よとうすい海うこのより
のむなうひよとるまうへ右の日ほと左右ひの
くさちらへとれへしねりまするやみるさみた
てこゝろや宗と代すへし

五十六
一 わたし橋の事
但し道と案紙同前也

五十七
一 身かわり道の事
れのはかまのたは縫ゝ當きのうへのはかまの
むなかひよりまく右のはゞをあけひれ
くみちへとゝのへ手の方ほどいふとすく
よの長つしかうたらてこゝろやくとすし

五十八
一 渋またす事
れのはかまて結ゝ縫ゝれよりはゝえあけの
むなかひよれまく右のはかまてあひかひのうえ地
かへされ前のこはかまこあまし後橋へかく利
むなかひとりの第文こしろあしはかまこあまし
前橋よりうしろひのくみちへとりなをし
こゝろえへのことし

五十九
一 とゝのへ候事也付の鞍かて案へし
也付のむなかけのむなかひとうらいふも
るの家ほどよさせしてはかまよれむなかひゝく
ま定むなかひとさしてよりへしく数定よ
てとゝせよまき文地にさしはなしかれ也

六十
一 さり案事

れのはしくるをゆきとゆつまのむすめひよ
はし姫とよふ人右のはしとたく寂ねぶとばちや
くとるゆしてい井三り橋よりつたる院
とつら寒とへし

十一
一 坂はしの事
れのはしすきゆうたのとゆつまのむすめひ
よは姫とよ副右のは成あく寂けりをとちや
くとるとして前橋よりつたへてかるる下

十二
一 かんやちおく湯事
橋姫とうたのえのと成つまのむすめひよ寂

をも又橋姫とよふもにくるを人て三り橋よ
かつたを繕とつらく端きたちての文し

十三
一 承ん踊をはるる事
れのはめて所はし姫よとるとまり待ちたとを
アのむすめひとよるうたる人右のはめてふりかひの
ちはゆ人とふるとて前橋よ承つたてはる下

十四
一 承んせんの为事
杜かしこしたしはしるしとゆうしやさし
やまれしおりよさりし

十五
一 九王宗事

六十六

一 河に綱をさゝへの事ハとをりのもろひよね
らへたる綱をとらせ候にとりまはし候へし右の
かしらみても河をもんでさきのうちへ綱をとらせ
ぬれ候て岸のうへ鐙をふみはさみて踏へしん
さきのうへ浪かゝるにさゝへいたしへし

一 川渡る時の事
河をこゆる時ハ河上のかたの手綱をとり浪を
みとりのもるかひよとりゆへ浪を十文字に
まうさきへ浪かけて水をきらへし川上の
かたの手綱をさゝへとりて候へ後し又さうに
ひかへさせ候へ左をも候へし鐙に文字ゆるよ
さきへ出渡候し

六十七

一 ねよりする事
手綱をひきむかひ鞍の前輪よりうしろ河へ
さわぎて手綱のはしをとり候へしるのまへへ
出し出るハさんとよりかきに好む好む
とさんとよりかせたり輪のうちてよくつき出
まのうへハ好らつとのうへみなかへうよすも
なれのし手綱をとりてなりやすとおもひし
らい出てもするしるハなかなかりたる

てうよく被下候

六十八
一 先年於丹州切戸岩見守ニ渡し申候及後間路
ハ家式ニ深浅小舟ニ而渡し申候上ニ候し秘事也

一 下から乗る事
下よりやりくとも乃ちのかきる時ニ一膝と
鞍つきをもたしなからのりよろくと
又发乗いりあしもきんよりしのとよくなりて掛
そろくのりかへ手綱をあけてやるへ乗

六十九
一 口伝川の乗廻し

一 よりく乗る事

上りくせしすとくのりなくては叶ハ又々せ
るとよろくるにそいかよしくれつう守るく
鞍ふちもわくりみかれ内をる時ハつ手すま足並
まやくるとくにもくもしらるをに口伝

七十
一 川つー

足洗いをすよ急湍ハのりく向拍鞍の事
急湍と鞍ふちあくいかもへ会ら向拍よる
そし御門よ猶とつきいくし猶とも急湍ハ
よいかもく手綱とまき腹帯とをからしかく
らあての事

七十一
一　よこいけるの事　父母みなくのよし

父母とハ右のへねうこゝろこゝろ右の陰こゝろ
右のうくさいあつかぬのよし　右へねうこよ
こゝろハ右のまさるとのよし　前のまいつき
もたせこゝろしみとのよし

七十二
一　よこいけるの事こいけ事とのよし

こいけ事とハ右へねうこゝろこゝろハ右へ行うこ
みまらしくのよし　又右へねうみよと
こゝろハへとゆるこゝろを後とゆへし

七十三
一　ねうむるの事

あうまかうこゝろ陰さこ彼よりひしらひて安
へし是かくとすくよなうこすいねうむうこの
陰かてさこ彼よりひしらひのよし

七十四
一　口伝てこれ右へかあまくれと後うめるの
もの門とねうくとこかしとなそいかふさ
けるもとらそつとねうあてそうそ川くい
かすねうあさこれそ川しともの門かこ川
行ひしらひてまく帰よりかうまてとゆる

七十五
一　なうハてみ右ほへ行あまく八つとまうぬる
の事

はいかやさうてこのしよとらはの日
をかゝやし前橋よりまゝるとはなち
てうしくゝとならめとしるへかしまる
ハとまうしまいらせ候

七十六
一 渡る馬乃口きわ立文事
さうらん、らんだざうらんさうとるなら
うわたる上さしのうらん、渡上さして前
ゑう又右うちなとなし女の前ゑさハ々まよ
う馬渡乃さんと文ゝたくのなりきさしれ
うらんよとなし手ゝ渡のとらへ扇ゝうれ

馬のれれ日れとうりよるしかしとれはよるま
れのハ条事へとましましなうれ扇あそく文
とるなれうしさて人ハなうらせのうか渡し

七十七
一 条付渡るの事
手渡さしのうらん、渡ハとをし馬方ハ前
ゑう人れうし右へ馬となして文ゝたく
のうらん、渡とをしのく

七十八
一 条付のくるる事
るのれれたの書の手渡し此らん、渡を
ととして馬方の前ゑうへ馬ならし右へと

さしはなて持参へし

七十九 一 参付乃まいらせ候馬の手
縄の右はくのたるなとさしはさみ候ハんへ縄はと
くらの前わにかけたるもよし
はしハしはなちて持参へし

八十 一 参付両国あるときハさす縄のさし縄の手にはく
野馬なとハ引るくるくるにハし参付つわ

かやうにさし参へし

縄のさし縄を
くらへとめてよし

八十一
一 とゝめらるゝ鞠在所の事
庭なとのはまりいとなくるおよとても
くはしかる所にてのへし但一段す
あのしきぬハ何し入めて当へし中れ
ゆきても金経の所にてのこへし

八十二
一 駒るゝ鞠ノ在所の事
こゝにとき所によりのへ鞠所にての也へし向
入ゐ一段鞠ハさしなる事なり但もまて成るへし

八十三
一 あきらぬるゝ鞠在所を何し 又ハとゝきゝ之
しけ面なとにて当へし

八十四
一 口伝ハ常ノ事
るうそとして口にて行時ニ可きことをとゝを
ねるそとしまりし之やとせきの家
へし也と口伝ハ也之

八十五
一 鞠ハ鞠よりゆる出る馬場事
まりし鞠かりて書伝ハひしらひて
鞠として所作さらし口伝ハ事

八十六
一 足をはさんとなる附目をとる事
常へし
るうたりしねくはとゝまりうし小

久事過し それゆても此ところいく流しを
あさ角ふかけへし

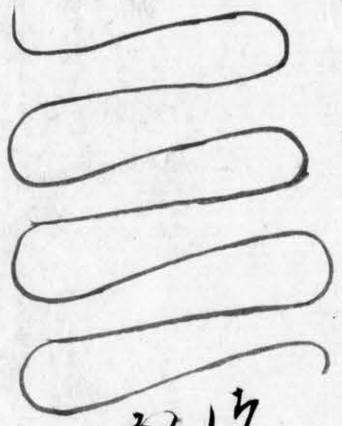
八十七 一 鞍ゟまへの事并ニ紋所の事
三つ鞘よかるもの也 是ハ古ゟ成之きかめ
のさへもとしきぬ方のさへまてとくるとこ
き内の様并のことく置紋と伝ふといふなし
しらる紋をつくるめ氣にて三紋事
第一と云ハ水にし也流されしとし一文
字よ嫡之流而て第へし

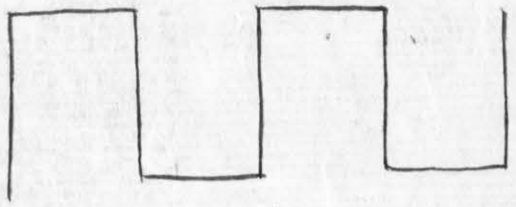
八十八 一 鐙のかさ様の事

鞘書文海三寸附をうらかへのかみと八
文字よむらさき嫡之かのくされたるとは
一文字の下ゟ入るへし

八十九 一 鞍長波紋様の事
これのうちの鞍ゟこくりにそりて取そ候し

九十 一 馬小紋様の絵図之事

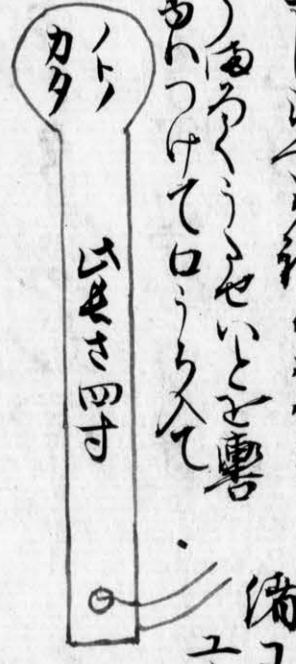




九十一

一 大鼓のこしらへ様之事

大鼓のこしらへハ緒ハ紅也
四方なり両そくうらせいと云事
のとを小もんつけて口より入て
のぞくへし



九十二

一 小荒円乃鼓のこしらへ様之事

小のうちのむちをねい
紫平にこしらへ
置し

九十三

一 鼓うら様并面白成なせし様の事

五方のむちゝ

いやしいのむちこむるにさし候へし

せんさんは両のかねるにかけ候て

きう奴ゆとよした

こむる小さき鐙さし候なから

鐙小とりかへこむとき候

そむちへし

こむるに書のさんは鞍の前輪にさし

こみて候さいてすへし

りとかねるむちか

ぬこかるこめのすきまかり目の前へむちを

もちうすまいめのまま成候えに

彼らしのむち候かし候

実まけのむちころくまかるぬ

るに候

そゑんのむちこむるに

よし我に鐙り候

あくこ縄たくむるを付てくすする
なけうるるもしう付あれのこそ
たくむるよよしあうし
めつまさすへし縁
またくへて縄ハう
みて第へし（腹縄）

山あひの鞍
川つて又ハ
あつのく
るこ川

さくうるのむち
人つ
ようう

さくうるによし大縄ツよ縁、
ちるたくちやくと引出すへし

よめのむちさこぬる小おし
家なうく人よういせへし

ちどのむちぬ氏又家
馬よこ川し

はあうしをぬ馬にあ足一束
末それ岩ねひのつの
下小あいにあつへし

おくそけむち
あるきくひする馬よ
うらやし

九十四
一 い音かひの針の事
さきほりのとめの人上来と...成候
かふ舌をつきぬくへしそれより利

先にてほりよ上番ときて舌
とつきとをし針よつよし

九十五
一 ちんぬきと成しさるふれの事
馬の右は方兵ちかひの字成ところのところ
前はこそそよさるまへ入れかせて右のかり成ち
をそこやさり御れのむをらひをれ雲成用事
さり御つかり

九十六
一 下地さりやとみ取事
馬の右の方のこうかひは字成ところのところ前
備はこそおてよ入そ入され申てかり成ゆきさ
りゆる之

九十七
一 道具かりしめて半ばのことく常事
右のまゆて上鑑成二ほこのうまよ取てへ前も

又前輪にかけてむかひへおしても常の通し
たのはめてうはかたのきしもにてむかひの
方へおしはつみにてかへしとまさしとるへて
常の通し

九十八 一 鞍をはさみて持事
鞍の前輪とをしの方へうるへきもちて
うまにあへしせりとてくつろきとる事

九十九 一 持き沓の事
左の耳よこの前二通へとる通し
あふさりや関の鞍にしよりて持ちへこなれ之
沓とよはしひきの物

百 一 志は沓きの事
はつみはくるへしとまむかへかかりて
手綱し鐙にはさみてちからもまちる
れとをさしへは持つきたる也之

百一 一 志はつきの事
紀をさは鞍むかひ鞍小なるの鐙はれの
まへに添きふかくあてあて通し

百二 一 馬小鞍とるへきたる事
通はせひもちよりはまきぬつうきつれとれ

其てうさせは尋ねしられの時為のようり
鞍を乃ちいてもいはとのめとりくくゐる
はそれそれとりてとかか利

百三
一 扇小事馬はゆ折さよみる事のかと為
とりたり
まふ河曲きめくしうきは道とも化尺の人よ
扇はさよ之て曲い路いゑよりとも尋
（下しる道）此時扇をそま折著はいはも此
河曲きめとかりしくゑ又里

百四
一 はあうさ折さう事

氣はよれゑとて（へそりたるまはくさ移あこ

百五
一 くみり婦こめる事又（不とはいかなはせ程
の沙汰事
之曲この（しとさすくしいろくの事とる為
付馬まろせよすゐ事とはやとかけるよ

百六
一 面曲のゐとゐよたれむ馬の事
乞ゐうき所あとくはえしかくいかふをゑうよ口と
引寮させたらふやかよ為也し

百七
一 口いたこ一服と口よりさこ馬はうく常事
いゑむ口のかまたはて手の門とはりくとゐよ

きり合ての多くへし是はくはしきそく家
なる利

百八
一 口禍をつゝのさるよりくの事
はのきは口とハ其の内ほいかもはるへしと云て
さは後よりひしらひ當へし是也そはよて
くわ家之

百九
一 茶ゆくはこはきのさみ病なき事
其ほさ其の内ほはのくなそこへしよと云て
前編よとしはくく口よハ少もはくもすめるる
其すちくとし皮ハりくほへるあてにしと

もとふのくせいと入ると合ての家へしかると
口ゆみをとるとやし由しきる利こしと後とよさ
へ情ほ入る人ハ茶のに之

百十
一 い氣にひの針の事
古されはるとのとの方へ其来と来る針ほ
そさはきめく見し針のはひやしハ船前之
桂ほるとロほなく古のあつさくろもかみし
かくんさしと沙き入る當へしんさしらく
皮とさると針の口ほのさよ入て當へし

百十一
一 はまろしけの針の事

くしやに家方の薬中に加しと入れての
ふしとみまんなる所あらと弥とみる所
よそろとふつきぬへし

百十二
一 同津まうし穴の針一段と秘事也事之
耳此まん中よりちあかりわれ此ちちの上
と耳此内のくるかうちよはき脇より針指
血を多し内より敵かたくきなるはそとく
とらのくゑし流くつし針ゟ小刀にて
もよきなり

百十三
一 馬口に多む馬口ろく小薬事
口いとむ方の上此内つよくろと合くすへし
つよきくるの平茶内所あつくと焼く致
よほいしらいて薬へし

百遍のるといふともなすもちかし一度
聞しれはきこえ候然候也

本推参申候さしよきさきに何の数馬
乃里来に何へハなきりこともす也
何こあきる縁るおもるる作り候
東法のまたは之きこかひ候すか
ひと返てたかくの人あるも海形には
下たはもちかくせらてなき法さも
馬あくす乗るも出ても問まなるを
よろの気をもよりさことしんなし

右此法は歯とことわり乃家とき之を
知こ縁をも手へなしく也

右一巻者親元石見守胤清相伝候
抄之聞書之条依御執心深重之

天文十八年八月十五日
荻野源六尉
康清在判

大推三郎殿 参

[illegible]

九州大學圖書印

百十七